

## 題目：文化心理学の視座から見た

### 日本人米国駐在員妻の異文化受容プロセス

保健医療学専攻・臨床心理学分野

氏名：皆川久仁子

キーワード：日本人米国駐在員妻，文化心理学，異文化受容プロセス

#### 【背景】

世界の移民流動の波は米国に広がり、人種は多様化し、それを受けて米国の心理支援分野は、カウンセラーが多人種・多文化に対応した認識・知識・技術を身につける必要性を訴えた。多文化カウンセリング能力(Multicultural Counseling Competencies)をカウンセラーの職能の一部と位置付け、専門家養成のカリキュラムに導入した。多文化カウンセリング能力とは、カウンセラーが i)自分の文化的アイデンティティを認識し、ii)クライアントの文化的世界観への知識をもち、iii)クライアントの背景にある文化に配慮した介入方法を提案する技術のことである。

2018 年の日本の外国人労働者数は 146 万人であったが、2019 年に政府が外国人労働者を新たに 34.5 万人受け入れる制度を施行したことで、さらに増えることが予想される。日本の心理支援者が多人種・多文化に配慮した認識・知識・技術を身につける必要性が高まっている。

#### 【研究目的】

異文化接触者の異文化受容プロセスを解明することを目標とする。異文化接触者が異文化環境で経験する葛藤の文化的・社会的・歴史的意味を解明し、異文化接触者が葛藤と折り合いをつけ、滞在国文化を受容するに至るプロセスを解明する。異文化接触者の語る物語を文化心理学の視座から分析することで、心理支援を求めるクライアントの文化的世界観の理解につながることを考えられる。

#### 【倫理上の配慮】

国際医療福祉大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：16-Ig-142）。研究を始める前に、研究目的、研究方法、同意は自由であること、一度同意した場合でもいつでも撤回できること、撤回しても不利益にならないことを、口頭および紙面で説明した。インタビューでは研究協力者の許可を得て IC 録音するが、個人情報保護に配慮し、人名や場所などが特定されないよう暗号化すること、保管期間終了後データはコンピューターから削除し、紙資料はシュレッダー処理することも合わせて説明し、同意を得た。

## 【研究方法】

米国に長期間滞在した経験を持つ日本人駐在員妻7人に研究協力を依頼した。語り手の声の中の「意味」を聴き取る方法としてナラティブ・インタビューを実施し、複線径路等至性アプローチを用いて研究協力者の異文化接触体験を分析した。

## 【結果と考察】

着目したのは、研究協力者が滞在国において経験した「葛藤」である。「夫が米国赴任の辞令を受ける」に始まり、最後は研究協力者全員が「滞在国の文化を受容する」に至るプロセスを5つのステージに分け、各ステージの葛藤を次の通り抽出した。ステージ1「日本に残るか、夫の米国赴任に同行するか」の選択、ステージ2「子供の教育を日本語にするか、英語教育にするか」の選択、ステージ3「家庭内役割分担を受け入れるか否か」の選択、ステージ4「自分の居場所を日本人コミュニティに求めるか、米国人コミュニティに求めるか」の選択、ステージ5「日本文化を維持するか、米国文化に同化するか」の選択。5つのステージの葛藤は、「日本文化維持か、米国文化受容か」の選択に集約できると解釈した。「人の心は文化との相互作用で存在する」ことを礎にする文化心理学の視座から研究協力者の葛藤を考察したところ、日本文化維持を促進する力として、「周囲との調和を重視する集団主義、思いやりを尊ぶ仏教、周囲に期待される役割を遂行する儒教的な役割志向、男性上位の夫妻関係、思いやりを育てる子育て、自己主張しない謙虚さ」などの価値観を抽出した。米国文化受容を促進する力としては、「自己と他人は切り離されているとする個人主義、多様化、自己主張するコミュニケーション・スタイル、自立心を育てる子育て、男女平等、ヨコの夫妻関係、自我の確立、個別化」などの価値観を抽出した。

研究協力者は、日米で異なる価値観に時には葛藤しながら、次第に一人一人異なる異文化受容過程を経て、やがて全員が「日本文化維持～日米文化統合～米国文化同化」という幅の広い収束地帯に到達した。

## 【結語】

一人一人の異文化受容プロセスの背景には各々異なる文化的・社会的・歴史的意味があることが明らかになった。心理支援を求めるクライアントの文化的世界観を理解するには、多様な異文化受容プロセスに配慮した心理支援を提供する能力が求められる。本研究が、クライアントの語りの中に含まれる「意味」を文化心理学的視座から解釈したことは、異文化受容プロセスの解明に意義があると考えられる。ただし、本研究で得た結論は本研究協力者7人の語りを分析して得た結果に基づいており、同じカテゴリーに入る人々が同じ結論にたどり着くわけではない。

限界として、研究協力者の選定基準が挙げられる。本研究協力者7人中6人が米国以外の国に滞在した経験があり、異文化受容プロセスが米国に滞在した結果に依るものか、他の国に滞在した経験が影響しているのか、明らかにすることはできなかった。また、社会の価値観は刻々と変わるといっても過言ではない現代社会では、研究協力者の年齢が異なれば、異なる結果を得る可能性は高い。今後は様々な年齢層や、米国以外の国に滞在した経験を持つ人々を対象にし、異文化受容プロセス、さらには多文化カウンセリングの研究につなげたいと考えている。